開発途上国スタディツアーを通じて学生は何を学んでいるか？ カンボジア・スタディツアーを事例として

原 智佐
お茶の水女子大学 グローバル協力センター

What do Students Study through Study Tour to Developing Countries? A Case of Study Tour to Cambodia

Chisa HARA
Ochanomizu University; Global Collaboration Center

Global Collaboration Center of Ochanomizu University has been conducting study tours to developing countries since 2011. This paper examines what do students study through study tours to developing countries, taking study tours to Cambodia in 2017 and 2018 as cases, and scrutinizing students' discussions and reports.

The significant points that the students have studied and acquired through the study tours are;

- understanding developing countries from diverse viewpoints, based on the information collected from the fields,
- deepening the understandings on poverty,
- deepening the understandings on inequality,
- evolving the perspective to understand developing countries —to observe respective phenomena from societal structural viewpoint, and also to understand the importance of individual life, and
- improving communication strategy in English.

Through the study tours, the impacts of learning from the fields are significant and the students realize the importance of studying from the fields. These impacts lead to students' motivation for further study not only on development-related issues but in various fields. The students' study from the fields can have more long-lasting consequences when it is backed by related preceding and theoretical studies.

keywords : study tour, Cambodia, education, choice of occupation, poverty, capability

本稿の目的

現在、多くの大学で、開発途上国へのスタディツアーが行われている。スタディツアーの目的は、異文化理解、途上国理解、途上国開発や国際協力の理解促進、フィールド調査の経験、コミュニケーション能力の向上、等様々である。

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、2011年度から、現場の視点からの途上国理解を目的に途上国へのスタディツアーを実施し、2018年度までに計142名の学生が参加してきた[*1]。本稿は、2017、2018年度のカンボジア・スタディツアーを取り上げ、担当教員である筆者が、事前学習、スタディツアー、レポート作成を通じての学生のファインディングや議論に基づき、学生が途上国の現場からの学びを通じて、どのように思考を深め、また、それが、今後の学習につながり得るのかを考察するものである。

なお、本稿では、学生の理解や思考の深化に焦点をあてているが、北林・福井・駒田（2014）では、同じプログラムに2011年度から2014年度の間に参加した75名の学生の報告書とアンケート結果に基づき、スタディツアー参加の動機、成果、満足度等に関する分析を行っている。

本実践報告作成に当たっては、大学の倫理審査を申請し、承認を得た。

授業の進め方

Copyright 2019. Ochanomizu University. All right reserved.

授業の概要

本スタディツアーは、2 単位の全学共通科目「国際共生社会論実習」（学部 1 ～ 4 年）、「同フィールド実習」（博士前期課程）として実施されている。2017、2018 年度の同科目（カンボジアスタディツアー）[*2] の履修学生は各 12 名、6 名で、学部・学年別の人数は以下の通りである。スタディツアーには、担当教員及びアカデミック・アシスタントが同行している。

Table 1　カンボジア･スタディツアー参加学生（学年･学部別／ 2017・2018 年度）

2017 年度　（人）

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	5	0	3	8
2	3	0	0	3
3	0	1	0	1
4	0	0	0	0

合計 12 名

2018 年度

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	計
1	2	0	1	3
2	1	0	0	1
3	1	0	1	2
4	0	0	0	0

合計 6 名

本科目は、フィールド調査を中心として、開発途上国の社会・経済・政治、開発にかかわる問題や国際協力に関する理解を促進することを目的としており、現場からの学びを重視している。科目全体は､事前学習、カンボジアへのスタディツアー、帰国後の報告書作成と発表からなる。

事前学習

事前学習では、文献講読、学生発表と議論を通じて、1970 年代のポル・ポト時代の状況、現在の農村、特に寡婦の生活、教育の現状等について、スタディツアーに向けての土台となる理解の形成を目指した。文献の選定にあたっては、学習のテーマに沿って、現場の状況がわかるようなものを選定した。事前学習の概要は以下の通り。

以上の事前学習を通じて、多くの学生は文献を通じて、はじめてカンボジアの現状についての情報に接した。

また、スタディツアーでは、学生個人の関心に基づき、調査テーマを設定し、聞き取り調査等を実施しており、そのための調査計画を策定した。出発前には、調査内容を踏まえた質問を英語で作成している。

Table 2　事前学習の概要

授業	テーマ	概要
第 1 回	ポル・ポト時代の政治と生活の状況	ルオン・ウン（2000）「最初に父が殺された」に基づく学生発表と議論
第 2 回	農村、特に寡婦の生活	佐藤菜穂(2017)「カンボジア農村に暮らすメマーイ」に基づく学生発表と議論
第 3 回	基礎教育の課題	Sothy･Madhur･Rethy (2015) *Cambodia Education 2015* に基づく学生発表と議論
第 4 回	調査の進め方	スタディツアー訪問先、聞き取り調査の方法、個人調査テーマ設定等についての説明と議論
第 5 回	ジェンダー課題と国際協力	国際協力機構（JICA）国際協力専門員・山口綾氏による女性の経済的エンパワメントと JICA の協力事業に関する講義
第 6 回	調査の進め方・安全講習	スタディツアー日程に沿った調査の進め方・役割分担等の話し合い
科目外	途上国の現場での調査の考え方と方法	NPO 法人ムラのミライ前川香子氏によるワークショップ（『対話側ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方）

事前学習段階での個人の調査テーマは以下の通りである。

・農村の生活、開発と行政
・教育の現状、教育の質、教育格差
・英語教育、IT 教育、舞踊教育
・教育と職業
・労働移動
・農村におけるジェンダー観、ジェンダー課題
・女性の教育と社会進出
・生活と文化
・開発の意味

調査テーマの設定に当たっては、主体的な取り組みを促すため､学生の関心や専攻を尊重している。一方で、学生間の議論やまとまりを考慮し、大括りのテーマとして､「教育」「職業選択」「ジェンダー」等の共通テーマを設定している。

個人の調査テーマ設定の時点では、学生も必ずしも自信を持って設定している訳ではないが、スタディツアーを通じて様々な情報を得、議論をしていく中で、問題意識が明確になっていく。その過程では、学生間の議論も重要な役割を果たしている。

スタディツアー

スタディツアーの日程は以下の通りである。以下には、2018 年度の日程を記載するが、2017 年度も概ね同様の内容である。

スタディツアーにおいては、農村における聞き取り調査をメインの活動とし、現場から学ぶことを重視している。聞き取り調査は、首都プノンペンから車で約 3 時間のコンポンチャム州の 2 つのコミューン（行政

Table 3　日程と活動概要（2018 年度）

日次	日程と活動概要
1 日目	成田空港発→プノンペン着 到着後、現地コーディネーターと打ち合わせ
2 日目	プノンペン→コンポンチャム 市内視察、農村における聞き取り調査に関する打合せ
3 日目	農村における聞き取り調査 - コミューンオフィス(人口、農業、雇用、出稼ぎ、コミューンオフィスの役割等) - 小学校長（児童数、授業内容、進路、学校の課題等） - 世帯 1（高校を卒業した女性のいる世帯。高校の様子、進路等） - 世帯 2（子供が出稼ぎをしている世帯。出稼ぎ先、仕送り等）
4 日目	農村における聞き取り調査 - コミューンオフィス(人口、農業、雇用、出稼ぎ、コミューンオフィスの役割等) - 中学校長・教員（生徒数、授業内容、進路、学校の課題等） - 世帯 3（子供が出稼ぎをしている世帯。出稼ぎ先、仕送り等） - 世帯 4（高校を卒業した女性のいる世帯。高校の様子、進路等） コンポンチャム→プノンペン
5 日目	カンボジア日本人材開発センター ポル・ポト時代の暮らし、クメール文化（舞踊）の講義、学生との交流、日本語教育に関する説明
6 日目	難民を助ける会（AAR）-Wheelchair for Development（WCD） インクルーシブ教育プロジェクトに関する説明、車いす工房の説明と見学、車いす受益者宅訪問
7 日目	カンボジア日本人材開発センター カンボジア学生のキャリア開発に関する調査の説明 JICA カンボジア事務所事業説明
8 日目	ツールスレン虐殺博物館、国立博物館 プノンペン発→
9 日目	→成田空港着（NH816） 到着後、レポート作成等に関する打ち合わせ

村）で実施している。これらのコミューンは、国際協力機構（JICA）が協力し、カンボジア女性省が実施していたジェンダー主流化プロジェクトのサイトであり、事前に現地のコーディネーター兼通訳を通じて、訪問の主旨を説明の上、協力してくれるコミューンオフィス、学校、農村の世帯を選定した。都市とは様々な面で異なる農村を訪問することは、カンボジアの多様な側面を理解するための本スタディツアーの主要な活動となっている。また、本スタディツアーでは、学生自身が当事者（農村の住民、都市の学生、障害者、ポル・ポト時代の経験者等）に質問し、様々な情報を得ることを重視している。こうした活動と通じて学生は、自分たちが知りたいことを明確にし、相手に伝える工夫をするとともに、何よりも、当事者の話から強いインパクトを受ける。こうした現場での当事者からの聞き取りは、有識者、研究者から話を聞くのとは異なるインパクトと自信につながる。とりわけ､学生が、人々の生活を見、話しを聞くことで、「途上国の人々」について、文献上での理解から、自分たちと同じように様々な思いを持ちながら生活している人々として、実態をもって理解すること、またそのことを通じて、敬意を持って接するようになることが重要である。なお、質問に際しては、相手に失礼がないよう、学生から聞き取り調査の目的等を説明すること、質問内容についても留意し、聞き取り調査に協力してくれる方々への敬意と感謝を忘れないことに留意した。

一方で、聞き取り調査は、限られた世帯で行うことになり、極めて限られた情報しか得られず、また、得られた情報のすべてが一般化できるものでもない。それ以前に、各世帯の子供の教育や出稼ぎに関する個別の事例を、社会経済的な背景や文脈に基づき、学生が正しく理解できていない場合も少なくない。こうした限られた情報をより広い文脈の中に位置づけ、適切に理解するためには、現場を訪問した後の振り返りが重要になってくる。振り返りには、担当教員とともにカンボジア人の通訳兼コーディネーターが参加し、学生に質問を投げかけ、また、必要に応じ、補足情報を提供することで、現場で得た個別の情報を、カンボジアの社会経済的な文脈につなげていった。なお、聞き取りは、英語・クメール語の通訳を介して、学生は英語で質問、回答者はクメール語で回答する形で行われた。

農村での聞き取り調査の後、プノンペンでカンボジア人大学生との交流を行っている。学生はここでも農村の問題についての質問を投げかけており、農村と都市の比較、格差といったことについての理解を深める機会となっている。

プノンペンでは、NGO 職員、JICA 事務所員と専門家、青年海外協力隊員といった現地に暮らす日本人にも話を聞いている。この機会を捉え学生は、農村で聞き取った内容の疑問点を質問し、また、教育の課題や出稼ぎについて、現地に暮らす日本人の見方を知ることで、これらの問題についての全体像を得る機会となっている。

聞き取り調査を含む訪問先での調査内容は、学生が分担して訪問記録にまとめている。

報告書作成と発表

スタディツアーから帰国後、学生は個人テーマに沿って、レポートをまとめる。レポート作成の段階で最も重要なことは、現場で調べた情報に基づき、思考錯誤し、自分なりの分析を加えていくことである。レポートを作成しやすいテーマを設定し、フィールド調査で「答え」を集めて、小さくまとまったレポートを作成することよりも、現場で見聞きしたこと、ときに矛盾する情報と葛藤し、自分なりの分析を行うことで、学生自身にも発見があり、レポートとしても読みごたえのあるものになる。

1週間という限られた日数のスタディツアーであり、極めて限られた情報しか集められないのは当然であるが、自分たちで得た情報をもとに、自分なりの発想で分析していくことは、今後の学習に向けての自分なりのテーマを発見することにつながる。そしてなによりも、フィールドの生きた情報は、人々の表情やその場の空気感とともに、思考を刺激し、今後の学習のモティベーションにつながる。

最終的に、レポート内容をプレゼンテーション・スライドにし、学内発表会、文化祭で発表し、本科目を終える。

学生レポート、プレゼンテーション・スライド、訪問記録については、「国際共生社会論実習」実施報告書（2017、2018年度）を参照願いたい。

スタディツアーを通じた学生の考察の深化

本項では、スタディツアーを通じての聞き取り調査、議論、報告書の作成を通じた学生のファインディングと考察の深化について、以下の5点について、具体的な事例に沿って述べる。

事前学習では、「教育の質」「農村の寡婦の生活」等について、現場の情報に基づく文献を見てきているが、紙の上での理解であったことは否めない。実際に農村を訪問して、どのような環境の中で、どのような生活をしている人々が、教育や生活、職業選択についてどう考えているかについて直接聞くことで、はじめて、実態を伴った理解が可能になった。こうした理解を土台として、次のような考察の深化が見られた。

（1）現場に根差した多様な視点での考察―教育と若者の職業選択を巡って
（2）貧困についての理解の深化
（3）格差ついての理解の深化
（4）途上国を見る視点の変化―社会の構造への視点と一人ひとりの生活への視点
（5）英語でのコミュニケーション能力の向上

以下では、これらについて具体的な事例に基づき内容を見ていく。

現場に根差した多様な視点での考察―教育と若者の職業選択を巡って

2018年度のスタディツアーにおいて、学生は、教育、特に教育の質と職業選択の2つを調査テーマに設定し、農村と都市で聞き取り調査を行っている。聞き取り調査、また議論を通じて学生は、事前学習において文献から理解していたのとは異なる、現場に根差した、多様な視点での考察を深めている。

学生はカンボジアの教育の問題について、事前学習の時点での、就学率の低さやドロップアウト、学校や教員の不足といった理解から、人々の話を聞くこと通じて、それらの問題の背景にある、農村における産業の発達の遅れや教員の給与の問題をはじめとする様々な問題を知る。また、農村の若者の職業選択について、その選択肢が限られることに驚く。さらに農村における教育の問題と若者の職業選択を結び付けた議論を展開していく。こうした議論を通じて学生は、教育と職業選択という身近なテーマからはじめて、これらとカンボジアの社会経済の発展との関係について議論することができた。

以下では、教育、職業選択、さらに両者の関係について、事前学習の時点での議論と、その後のスタディツアーを通じての議論の深化について述べる。

教育の課題についてのファインディング　事前学習の時点で、途上国の教育の問題について学生に尋ねると、「学校が足りない」「貧困、また、家の手伝いや仕事のために学校に行けない」といった途上国の教育の問題のいわばステレオタイプを挙げる。こうした理解の背景について尋ねると、「カンボジアに学校を作ろう」といった内容のテレビ番組を挙げる学生もいる。教育に関心がある学生は、「教員の研修が不十分であり、教育の質が問題」といった点を上げる。

事前学習では、カンボジアの初等教育の就学率や退学率、教員や教育の質について具体的に記述した文献をみてきているが、紙の上での知識であり、実態をともなったものとはなっていない。

こうした問題について、農村での聞き取り調査において、コミューンオフィス2か所、小・中学校各1校、農村の世帯4世帯で聞き取り調査を行った。学校の生徒数、教員数、授業科目、就学率等について情報を得るとともに、学校・授業の課題、卒業後の進路、これらの男女別の傾向、ドロップアウトの理由等について、コミューンオフィス、学校、生徒と親、それぞれの視点からの意見を聞くことができた。聞き取り調査を通じて、頻繁に聞かれた点として、教員給与の低さと、中学校段階でのドロップアウトがある。

教員給与については、その低さのため[*3]、特に農村部で教員が不足しているという話が聞かれた。学校の

課題、特に教育の質[*4]が低いことの背景には、教材や教員の研修機会[*5]の不足といった問題のみならず、教員の給与の低さが大きく影響している。

また、学校の授業は午前中のみであり、午後は、教員は補習授業（additional class）で教えている場合が多いとのことであった。補習授業は多くの場合、有料で、学校の授業より質がよいとのことである。補習授業については、学校の授業を補完するという側面と、教員の収入機会という二つの側面がある。

給与の低さが、教員の不足、また、教員が有料の補習授業に注力するため、学校での授業がおろそかになるという形で、学校教育の質に影響しているという理解が得られた。

また、中学（8年生前後）でのドロップアウトという事例が、特に男子生徒について多く聞かれた。この原因については、学校にかかる費用を払えないといった理由よりも、学校に行っても、教育が身につかない、中学を卒業したからといって、良い職につける訳ではない、中学中退でも建設現場労働者等の職はある、といった理由による事例が多いようであった。こうした中で、中学段階でのドロップアウトを人々がネガティブに捉えていないように見受けられたという感想を持った学生もいる。

職業選択についてのファインディング　事前学習の時点で、職業選択について学生は、これから社会人となる自分たちとの比較で、カンボジアの若者は何を考え、どのような職業を選択しているのか、という関心を有している。

農村の学校や世帯での聞き取り調査を通じて、生徒の進路、大学への進学率、生徒や親が考える将来の職業等について情報を得た。そこでの重要なファインディングの一つは、農村に住む人々の職業の選択肢は、農業、村の近隣にできた縫製工場、プノンペンや海外の工場、建設現場への出稼ぎ[*6]、といったものに限られている、あるいはそのように認識されている、ということである。高校を卒業した後、教員養成校で学び、教員になるという若者もいたが、給与の低さから必ずしも人気の職ではないようである。家族の支援を受けて、大学までいって、給与のよい職につく例もあるが、多くはない。非熟練の職が多い中で、中学を卒業しても、あるいは、高校に行っても、より給料の高い職業につける訳ではないという認識があり、中学の途中（8年生前後）で退学し、出稼ぎ等で働きはじめる事例が多く、職業選択の幅の狭さとドロップアウトが関連している様子も見てとれた。

こうした状況に対して学生からは、職業選択の幅の狭さに驚いたという発言が繰り返された。

教育と職業選択の関係についての議論　教育と職業選択を巡るこのようなファインディングに基づき、両者の関係を巡って学生の議論は展開していく。

学校での教育の質が必ずしも高いものではない、かつ、中学、あるいは高校を卒業しても、給料の高い職に就ける訳ではない、というカンボジアの現状は、教育が生活や職業において有用な能力を身に付ける上で重要であるという日本では一般的な理解が、カンボジアではそうではないのではないか、といった考察につながる[*7]。

教育を受けて、将来の選択肢を広げるという自分たちの常識は、カンボジアの農村の若者にとって常識ではないことを知り、そこから、途上国の若者と彼らを取り巻く社会についての議論が展開されていく[*8]。

さらに、「職業選択の幅の狭さ」の原因についても学生間で議論が行われ、その原因として、地方における雇用の源となるべき産業の発達の遅れが上げられた。さらに議論は、産業の発達の遅れと税収の低さ、教員の賃金の低さ、教育の質といった問題が相互に関係しているといった議論につながっていく。

貧困についての理解の深化

スタディツアー前の学生の途上国の貧困についての理解は、所得が低い、そのため学校や病院に行けない、電化製品や車を持っていない、道路や水道が未整備といったところであり、所得や持っているものを貧困の概念の中心としている。

実際に農村の人々に話を聞く中で、問題は、所得や持っているもの、あるいは、学校に行っているか、ということだけではなく[*9]、アマルティア・センの提唱するケイパビリティ（潜在能力）の考え方重要なのではないか、ということに学生は気づき始めている。このことを、職業選択を巡る議論を通じて見てみたい。

自分たちと同世代の、農村に暮らす高校を卒業したばかりの女性に、教育や職業選択について話を聞いた際、彼女は、経済的な理由から、大学進学をあきらめざるを得ず、ツアーガイドになるという将来の夢はあっても、現実的な職業の選択肢は、教員養成校に進学して、教員になることしかないという話を聞いた。

このことについて学生は、次のように考察している。

「自分の意志で教師になることを決意したことには変わりないだろう。しかし、私の目には、教師という職への希望や頑張りたいという熱意が見られなかった。むしろ、自信がなく、あきらめの表情がうつっていたように感じた。農村（特に貧困地域）では、職業の選択肢が少ない上に、夢見る職業のために何の挑戦もせずにあきらめるしかないことが、もはや当たり前となりつつあるのではないだろうか。」（学生レポート・お茶の水女子大学グローバル協力センター，2019）

別の学生は農村の若者の職業選択について、次のように考察している。

「カンボジアの農村の若者たちにとって、職業は必ずしも「選択」するものではないということがわかった。（中略）彼らが（農家、工場労働者といった）職種にこだわりを持って、能動的に選んでいるという印象は薄かった。事前に日本の場合を踏まえて想定していた職業選択の要因としては、性別、学歴、親の地位などがあり、それらをベースとして、収入、やりがい、労働条件、自分の能力を活かせること、社会で認められること、などを検討していくのが職業選択であると考えていた。しかし、カンボジアの農村では、ほとんど選択肢が与えられておらず、そもそも選択肢に関する情報を知らないのではないだろうかという結論に至った。」（学生レポート・お茶の水女子大学グローバル協力センター，2019）

このような見方は、貧困や開発に関するアマルティア・センの議論にも通じるものである。センは、開発の検討の焦点は、人々の生活の性質を含む必要があると述べ、さらに、よい生活は、所得、財、GNPといった指標のみによるのではなく、その人がどのようなことをなし得（doings）、どのような状態のあるのか（beings）が重要であるとし、この「であること」「すること」を「functionings・機能」と名付けている。さらに、その人の「であること」「すること」は、多くの代替的な「functionings・機能」の中から選び取られたものであり、この多くの代替的な「functionings・機能」をケイパビリティ（潜在能力、「であること」「すること」の束）と呼んでいる。センは、貧困とは、基礎的なケイパビリティが欠如した状態であり、開発において重要なことは、ケイパビリティが拡大することであると捉えている。（Sen, 1988、1990）

学生が農村の若者に見た「職業選択の狭さ」は、ケイパビリティの制約と捉えることができる。

さらに、カンボジアの農村の若者の将来の選択の幅が限られている状況と、多くの選択肢がある自分たちの状況を比較して、このような差が発展の差なのではないか、という考察をしている学生もいる。

「（前略）国が発展するということやその国の人々の暮らしが豊かになるということは、人々の視野を広くし、より高い目標に向かわせることに繋がっているのだと感じた。日本で暮らす私は、自分の生活にある程度のゆとりがあるからこそ周囲の状況に目を向けることができ、問題を発見したり解決策を考えたりする術を身に付ける機会も得られるのだということに改めて気付かされた。（中略）私はこれまで、発展にゴールはないし、開発には弊害もあるため必ずしも為されるべきものではないと考え、途上国と呼ばれる国は果たしてどんな点で「途上」にあるのか、疑問に思ってきた。今回のカンボジア訪問を通して、自分が幼い頃から当たり前のように持っていた将来の夢、周囲から受ける期待や応援というものも発展の賜物なのだという考えに到った。（後略）」（学生レポート・お茶の水女子大学グローバル協力センター，2018）

ここで興味深いのは、あるいは、カンボジアにとって懸念されるのは、教育が若者のケイパビリティを広げることにつながっていない、あるいは、つながっていないと理解されているのではないか、という点である。センは、ケイパビリティの拡大における教育の重要性を重視している。学生は、大学で学ぶことは、自分たちの将来の選択肢を広げると考えている。しかしカンボジアの農村では、教育と職業選択を巡る議論で見たように、これらの理解とは異なる状況があるという考察がなされる。

「職種が限られている中、ある程度の教育を受けたところで賃金の高い職につながらないのであれば、教育を受けても時間の無駄、それならば働いてお金を稼いだ方がましであるという考え方があるのではないだろうか。」
「カンボジアでは、もはや中退することが人々の間では当たり前のこととなっており、教育を受けないことの重大性を自覚していないのではないか。」（学生レポート・お茶の水女子大学グローバル協力センター，

2019）

職業選択の幅の狭さが、教育への期待の低下につながっていること、そして、本来、ケイパビリティを広げる上で重要な役割を果たすことが期待されている教育が、機能を果たしていない、ということにつながる考察である。

格差についての理解の深化

特に 2018 年度、スタディツアーを通じての気づきとして、学生が何度も挙げていたのは、農村と都市の格差に関する諸点であり、この点は、スタディツアーを通じての横断的なテーマとなった。

日本にいても、格差について耳にすることは少なくないし､関心をもつ学生も少なくない。しかし同時に、日本における格差という問題について、多くの学生が実態をもって理解しているとは言い難い。

一方、カンボジアでは、ひとたび農村を訪問すれば、道路等のインフラ、住居環境等、都市との間での目に見える格差を実感せざるを得ない。学生の感想にも、「プノンペンとコンポチャムでは、時代が違うようであった。」というものがあったが、まさにその通りである。また、教育の質、職業選択の幅、また、経済活動についても、都市と農村の格差は大きい。

さらに学生の議論は、こうした格差が、若者の将来についての考え方にも影響していることにつながっていく。都市の大学生は、自分たちと同じように、外資系企業、IT 技術者等々の職業につきたいと考えている。一方で農村に育った若者から聞かれるのは、縫製工場、出稼ぎがほとんどであり、高校を卒業した生徒でも、教師という選択肢しか聞かれない。さらに学生は、農村の高校を卒業したばかりの女性から以下のような発言を引き出している。

「農村の女の子と都市に住む男の子では、同じように高校に通っても、得られる機会は同じではない。」（学生レポート・お茶の水女子大学グローバル協力センター , 2019）

このような農村と都市の間の様々な差異が組み合わさって、人々の考え方にまで影響を及ぼし、農村の若者の将来の選択肢を狭めていること、そのような格差を作り出す重層的な構造は学生に強い印象を与えている。

さらに学生は、こうした問題について、都市の大学生の意見を聞いている。これに対する都市の学生の答えは、農村の問題を知ってはいるが、改善しなければならない、という意識は弱かったという。都市の大学生からは、「農村を支援するよりも、給料のよい会社に就職したい。」、中には、「農村はどうしようもない。」という発言も聞かれたという。（学生訪問記録・お茶の水女子大学グローバル協力センター , 2019））貧困問題についてしばしば、「貧困層から見えている問題が、富裕層からは見えていない」という指摘がなされるが、まさにこのことを学生はカンボジアの都市の学生から引き出している。

途上国を見る視点の変化―社会の構造への視点と一人ひとりの生活への視点

カンボジアの人々の暮らしを見、人々と話をすることで、途上国を見る学生の視点も変化していく。

スタディツアーを通じて、教育の質、職業選択といったテーマについて、単に状況を日本と比較するのではなく、これらと相互に関連する課題、例えば、教員の給与、税収の低さ、産業の発達の遅れ等に目を向け、カンボジア社会の文脈、構造の中で理解しようとする発言がみられるようになっていく。

問題の構造に目を向けるようになるのと同時に、人々の生活を見、話をすることで、一人ひとりの生活の大事さに気づいたという学生もいる。

「これまで、開発途上国といえば、貧しくて教育も受けられない子どもたちのいる、支援を必要としている国で、日本での自分の生活とは別世界であるように感じていた。しかし、カンボジアの人々にも自分と同じように生活があり、それを日々営んで生きているのだと強く実感できた。」（学生レポート・お茶の水女子大学グローバル協力センター , 2019）

こうした視点の変化は、途上国の生活や人々の考え方の背景、構造を理解し、何よりも一人ひとりに敬意をもつという意味で、重要な気づきである。

英語でのコミュニケーション能力の向上

英語学習は本科目の第一義的な目的ではないが、英語での聞き取り調査の経験は、英語でのコミュニケーションの向上という意味でも一定の意義があると考えられるので、ここで触れる。聞き取り調査は、英語、さらに通訳を介してクメール語で行われた。このような聞き取り調査を行うのは、学生にとって初めての経

験である。予め調査内容を検討した上で、英語での質問も作成しているが、フィールドでの調査は計画通りにはいかない。特に聞き取り調査では、相手の回答振りに応じて、質問を深めていくことが重要であるが、質問も英語もすぐには出てはこない。

このような場面で、学生には2つの異なる対応が見られる。1つ目は、適切な質問を、きちんとした英語で言おうとする、というものである。そのために、頭の中で予め文章を用意することが優先してしまい、「これを聞きたい」という気持ちは二の次になってしまう傾向がある。2つ目は、とにかく聞きたいことを聞こうとする、という対応である。英語の文章として正しいかどうかにはこだわらず、とにかく、話始める。こうした場合、文章としては不十分であっても、キーワードを述べると、通訳が、「こういうことか？」と聞いてくれたり、他の学生が助け舟を出してくれて、なんとか目的が達成できる。「とにかく聞きたいことを聞く」という姿勢の方が、次の質問、次の質問、という形で、質問が深まっていくし、得られる情報も多い。このことに関連してある学生は次のように述べている。

語学力向上への意欲も得たが、同時に、伝えたいという思いの強さがいかに共通言語を持たない方との対話の中で重要となるかを初めて実感し、交流において、言語を介さずとも相手と真摯に向き合うことで心に残る関わりが得られることを肌で感じた。(学生アンケート , 2017)

このようにして学生は、「英語を話す」のではなく、「英語を使ってコミュニケーションする」ことを経験する[*10]。

途上国スタディツアーの意義

最後に、前項「スタディツアーを通じた学生の考察の深化」で見た学生の考察の深化を踏まえ、本スタディツアーの意義として3点挙げる。

1点目は、現場から学ぶことの重要性、インパクト、おもしろさに学生が気づくことである。学生は、農村に暮らす人々、小中学校の教員等から直接話を聞く中で、途上国の課題やその背景に関する様々な情報を得、考察していく。こうした考察一つひとつが重要であるとともに、一連の経験は、自分で情報を得、理解を深めるというわくわくするような経験であり、自信にもつながる。こうした経験は今後、社会の様々な問題を見る際のいわば核のようなものを形づくっていくことが期待される。

前項で見た通り、学生は、教育、職業選択といった自身に身近なテーマからはじめて、途上国の社会や経済との関係へと議論を展開している。こうした社会を構造的に見る視点は、当然日本の社会を見る上でも生かされる。また、こうした現場から学ぶことの重要性の発見は、途上国研究といった分野に限定されるものではなく、今後、学生が学ぶ様々な分野にも関連すると考えらえる。

2点目として、学生の現場での発見は、その後の学習にもつながる内容であることが挙げられる。「スタディツアーを通じた学生の考察の深化」で見た通り、学生の現場での発見は、途上国研究、開発研究をはじめとする研究にも通じる内容を持つものである。こうした現場での発見を、既存の研究等との関連づけて見ていくことは、スタディツアーでの経験を一過性のものに終わらせず、さらに議論を発展させることにつながる。現場から学ぶことと、これまでの研究の蓄積から学ぶことを行き来することで、学生は社会を見る視点をさらに深めるであろう。

3点目は、「遅れた途上国」「援助が必要な途上国」といったステレオタイプの理解から脱し、途上国といわれる国々にも一人ひとりの生活がある、という当たり前のことを実体験し、そのことに敬意を払うようになることである。学生の中には、国際協力を志すものもいるし、途上国研究を行いたいと考えるものもいる。いずれにしてもその基礎には、途上国の人々とその生活への敬意があることが重要である。

謝辞

今回のスタディツアーの実施に当たっては、聞き取り調査に協力していただいた農村の方々・コミューン関係者・教員、障害者支援を行う特定非営利活動法人 難民を助ける会・車いす工房とその受益者・家族の方々、JICA カンボジア事務所・青年海外協力隊員・事前学習で講義をしていただいた JICA 国際協力専門員、学生交流やカンボジアの社会についての貴重なお話を伺う機会を提供していただいたカンボジア日本人材開発センターの方々をはじめとする多くの方々に多大なご支援をいただいた。コーディネーター・通訳を引き受けていただいたカンボジア人男性には、日程調整や適切な通訳のみならず、カンボジアの社会を理解する上での多くの貴重な情報をいただいた。また経費

面では、独立行政法人日本学生支援機構の海外留学支援制度による支援を得た。すべての関係者の方々に改めてお礼を申し上げたい。

注

*1 これまでの派遣国は、東ティモール、フィリピン、ベトナム、バングラデシュ、ネパール、カンボジア。グローバル協力センターが実施するスタディツアー実施の沿革については、北林・福井・駒田 (2014) 参照。

*2 2017、2018 年度、同科目でカンボジアの他に、ネパールへのスタディツアーが実施されている。

*3 聞き取り調査で教員の給与は、月 250 ドル～ 300 ドルとのことであった。一方、近隣の縫製工場の給与は、月 170 ドル～ 300 ドルとのこと。

*4 今回のスタディツアーは、カンボジアの夏休み期間中であり、実際に授業を見ることはできていない。

*5 教員研修については、新規カリキュラム導入時の研修やクラスター研修が実施されていることを確認している。

*6 コミューンオフィスでの聞き取りでは、1 つのコミューンでは、人口約 7,000 人中 61 人が、別のコミューンでは、人口 6,925 人中 829 人が出稼ぎをしており、出稼ぎ先はプノンペンの他、タイ、マレイシア、韓国、日本が多いとのことであった。日本への出稼ぎは技能実習制度と考えられ、昨今報道されている外国人労働者の問題について、送出国の状況を知り、送出国と受入国の関係を考える機会となった。(2018 年)

*7 バナジー・デュフロ（2012）は、途上国、特にインドの教育の問題として、学校があっても子供たちが学校に行かない、学校に行っても学んでいない、教育と職業に関する親の誤解、教員の欠勤といった問題を挙げているが、今回の学生の議論と共通するものがある。

*8 農村の若者の職業選択の幅の狭さについての学生の感想について、「生活のために収入を得ていかなければならないが、農村部の雇用機会は限られる。」というカンボジアの現実を理解していないと見ることもできるし、実際、そうした面はある。しかし同時に、現実を理解した上で、苦労しても勉強して、将来の選択肢を広げることができる社会と、そうでない社会の違いは大きい。

*9 今回の調査では、所得がどれくらいであるか、貧困線以上・以下であるか、といった点については聞き取っていない。

*10 応用言語学者の久保田竜子は、「越境コミュニケーションの資質」として、「言語スキル」と並んで、「ストラテジー能力（ストレートに、シンプルに、クリアに、かつ失礼にならないように伝える）」、「伝え合おうとする意志」等を上げている。（久保田 , 2018）

参考文献

Banergee, A.V & Duflo, E. (2011) Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty, Public Affairs 山形浩生訳（2012）「クラスで一番」pp.104-144『貧乏人の経済学』みすず書房に所収.

Sen, Amartya (1988) The Concept of Development. pp.10-26. In Chenery and H. Srinivasan, T.N. (Eds.)(1988) “Handbook of Development Economics, Volume I” Elsevier

Sen, Amartya (1990) Development as Capacity Expansion. pp.41-58. In Griffin, K & Knights, J (Eds.)(1990) “Human Development and the International Development Strategy for the 1990s” United Nations, MacMillan

Sothy, K, Madhur, S, Rethy, C. (2015) Cambodia Education 2015 Cambodian Development Resource Institute

Ung, Luong (2000) First They Killed My Father: A Daughter of Cambodia Remembers HarperCollins 小林千枝子訳（2000）「最初に父が殺された」無名舎

お茶の水女子大学グローバル協力センター(2018)「2017 年度 国際共生社会論実習」実施報告書

お茶の水女子大学グローバル協力センター(2019)「2018 年度 国際共生社会論実習」実施報告書

北林春美、福井美穂、駒田千晶（2014）「開発途上国スタディツアー実施報告」『高等教育と学生支援』5, 48-54

久保田竜子（2018）「英語教育幻想」 ちくま新書

佐藤菜穂（2017）「カンボジア農村に暮らすメマーイ（寡婦たち）」 京都大学学術出版

関満博（2002）現場主義の知的生産方法　ちくま新書

2020 年 2 月 19 日　受稿